

小田実全集（小説 第39巻）

終らない旅（上）



講談社

小田実全集

Makoto Oda



終らない旅
(上)

一 今ここにいない

父の震災での不慮の死のあと、久美子は父を忘れようとした。懸命に努めた。

父の死はあまりにも突然で、むぎんだった。何ごとであれ、思い出したくなかった。楽しかったことであれ、いやだったことであれ、久美子は父にまつわる記憶も、思いも、一切をからだのなかから力づくで押し出すようにしてしばらく暮らした。

しかし、時間の経過はおそろしい。また、むごい。忘れようと努力しようとしまいと、どんな記憶も記憶にからむ思いも、時が経つにつれ、自然に、また、急速に薄れ、ぼやけ、たいていが消える。

父の死のあとしばらく、生きていたときよりもかえって数多く、またはるかに鮮明に久美子の眼に見えて来ていた父の姿——大半が奇妙なことに久美子もものごころついて少し経ったころの稚ない少女の記憶に残った、まだまだ若い父の姿だったが、そのいつとき鮮やかに眼に浮かび上がって見えて来ていた父の映像も、くわえ煙草でかつこうよく歩く、そう稚ない少女の眼に見えた父であれ、何がそのときあったのか卓子を隔てて母親と対峙するように気難しげに坐った父であれ、すべてがやがて薄れ、ぼやけ、そのうち多くが消えた。

震災から、いや、父の死からもう八年が経っていた。その年になって、父が思いもよらないかたちでよみがえって久美子の世界のなかに強引に押し入るようになって来たのは、久美子にとってまったく見知らぬ女性だったジーンが突然、誰からの紹介もなしに電話して来たからだ。いや、その

ときには、彼女はジーンと自分の名前を告げただが久美子は聞き取っていなかった。その若い、そうとつさに久美子が判断をつけた女性は久美子になじみのあるアメリカ英語で、自分が今かけているこの電話は「ミスター・ツヨシ・サイトウ」のお宅の電話でしようかと、遠慮がちではあったが一気にそれだけ切れ目なく訊ねた。久美子がそうだと答えると、「ミスター・ツヨシ・サイトウ」はご在宅でしょうか、ご在宅ならお話ししたいと、久美子になじみもなつかしさもあるアメリカ英語を少し強引につづけた。

久美子が彼女のこの唐突なことばに「彼は今ここにいない」ととつさに応じてしまったのは、それがあまりにも思いがけないことばだったからだ。久美子の答自体はまちがってはいいない。彼——斉藤毅は、今、久美子の見知らぬ世界のどこでどうしているかが、まちがいでなく「今ここにいない」。

自分でも思いもしていなかったことばでそう答えてしまったあと、久美子はほんとうに父が今にも外から帰って来るような気がした。ちよつとした用足して外出していたのではない。若いときから父が使っていたという大きな、見るからに古びた革靴ひとつを抱えて（父は飛行機に乗るときその大きな、ところどころ擦り切れた貫禄の革靴を託送の荷物扱いにしなかった。いつも後生大事に抱えて機内に持ち込もうとしてしょつちゅう係員ともめたが、父は意に介さなかった。あれやこれや言い合つて初志を貫徹、機内に持ち込んだ）、現地仕入れの海外の旅から帰って来た父の姿が眼に浮かんで来ていた。

父と母、二歳ちがいの夫婦それぞれが中年から晩年にさしかかったところで、人生のその時期には男性も女性も最後の決断をするのかも知れない、母はこれこそが私が若いときからずつとやりたかつ

たことだったと突然言い出して（母はふだんはおとなしかったが、いったんこうと決めたら梃子でも動かない強いところがあつた。これは親譲りで久美子もそうだと、久美子の別れた夫が言つただけではなかつた。さんざん母のその性^{さが}に悩まされていたにちがいない父も、久美子についてときどき呆れ果てたように同じことばを口にした）、ヨーロッパやアジアの陶磁器のお茶碗やらテーブル・クロスやら民族衣装のブラウスやらのお土産品まがいの小間物を売る、父からの資金提供と友人からの借金で駅前の雑居ビルの一階に小さなお店「ロータス」を、父は資金提供のほかにもそれなりにあれこれ手伝つて、とにかくめでたく開店に漕ぎつけ、そのころにはそうしたお店はあまりなかつたので物珍しきで初めの二年間ほどはけっこうはやつた。しかし、そのうち類似のお店があちこちに行くと、かんじんの商品の仕入れをまったく人任せにしていたのが祟つておきまりの経営不振、ついには閉店寸前までになつた。「今まで放つておいてわるかつた。これから私が少し助けることにするよ」と言い出したのは父だつた。こういうとき、決断すると父のすることは早い。そのまま勤めていれば定年まで万事こともなく安泰だつたはずの地元の大学の英語教師の職をやめるまでして、本格的に母のその気まぐれ、いや、決意のお店「ロータス」の経営再建に乗り出した。

父が再建に乗り出してからは、それまでどこかの輸入業者に頼んで商品を仕入れていたのを、半分ほどは直接父が現地へ出かけて仕入れて来ることにして、父はおよそひと月に一度はヨーロッパやアジアのどこかの国のどこかの土地へ出かけた。たいていが五日、六日、長くて十日から二週間の旅だつたが、「お父さんはあれで旅行してご自分でせいだい楽しんでいありますのや」との母のいやみつきの現地仕入れで、商品がはるかに安く手に入るようになった上に、若いときに留学して海外へ出

かける機会がその年代の日本人としては多かつた父は、商品の選択にも目が肥えていたにちがいない、そのうち「ロータス」はお手ごろの値段でいい品物が手に入るお店として、ひところ若い女性にかなり人気のある店になっていて、女性週刊誌でも紹介された。父も、母の店の「内助の功」の人として、また「大学教授転じてアジア・西洋小間物屋店主」として、小さな写真つきでその女性週刊誌の呼ぶ物連載記事「近ごろ話題のお店」に登場していた。

「近ごろ話題のお店」に出ていた写真のなかの父は、とってつけたようにぎこちなく微笑していて、父の人の好きは出ていても、人の好きの底にある、そう久美子がときどき父に感じとっていた、威厳はなかった。彼はただチンマリと小さくかわいく見えた。「近ごろの女の子はこんな貫禄のないおじいちゃんが好きみたいですよ」と、こういうことにかけてはいつもひと言多い母がおきまりのいやみを口にしたが、父は黙って、それこそとってつけたように微笑した。

父の努力で「ロータス」の再建がなつて、「やつぱりこのお店、やつてよかつたですやろ。あなたかつてしようむない大学の英語の先生やつてはるよりよかつたですがな」と、聞きようによつては傲慢に聞こえる（そう久美子は聞いた）ことばを口に出し始めたところで、母は急性の癌であつけなく亡くなつた。もうそのときには結婚して家を出ていた久美子は母の臨終に立ち会えなかつたが、あとで聞いた父の話では、『「ロータス」をなんとか』が母の最後のことばだった。「あの人はお店のことがよほど気にかかつていたのだね」と、母の死後、父はさびしげに笑いながら言った。「それですよ。お店はあの人の夢でしたから。」久美子が言うと、「しかし、あの人のことばの最後の『なんとか』をどう理解すればよいのかね。なんとかお店を大きく隆盛にしてくれと言つたのかね、それとも、なん

とかもちこたえてくれと頼んだのかね。後者なら、それこそなんとかできるかも知れんが、前者は無理だね」と、久美子のお座なりなことばに軽く反撥するように、笑いつづけながらだつたがキツパリとした言い方で言つた。そのあと父はたしかに「なんとか」「ロータス」をもちこたえるように努力していて、その努力は成功していた。いや、そのうち、「ロータス」はなんとか大きく隆盛し始めようとしていた——とところで「震災」が来て、父は死んだ。

久美子の「彼は今ここにいない」の答を受けて、ジーンは、いや、まだそのときにはたぶんアメリカ人の若い女性としか久美子には見当がついていなかった電話の相手は、あとをどうつづけていいのか戸惑つたにちがいない、一瞬黙り込んだあと、「じゃあ、いつお帰りになりますか」と訊ねて来た。この彼女の質問に「さあ、いつになりますか」と、父が生きていたころ、彼が現地仕入れの海外の旅に出かけているあいだにかかつて来た電話での受け答えで、ときどき「ロータス」へ出かけて手伝い仕事をしているときに久美子がよく口にしたことばで思わず答えてしまったのは、さつきからその現地仕入れの旅から大きな革靴を抱えて家に帰つて来たときの父の姿が眼によみがえつて来ていたからだろう。思わずそう答えてしまったあとを「そのうち知らせて来ますが、まだよく判りません」と、あこのころの電話での受け答えのなかで、これも久美子がときどき口にしたことばでつづけた。そのあと、「父の旅は鉄砲玉の旅で、どこでどうしているのかいつもよく判らないのです」と、父の親しい人たちによく言つた愚痴交じりのことばももう少しで口から出かかったが、それは抑えた。

電話の相手は黙り込んだ。あきらかにあとをどうつづけていいものか思い惑つたにちがいない、しばらくの沈黙のあとで、「実は私はあと三日でアメリカへ帰らなければなりません」と、さつき

までの落ち着いた口調とは打って変わったせつぱつまった言い方でのことばが、手にした受話器の底から聞えて来た。困惑しながら緊張した表情でそれだけのことばをようやく口に出したアメリカ人女性の顔が見えて来るようだった。久美子が、これは久美子のほうがどう応じていいのか判らないまま黙っていると、あきらかにためらいを声に出しながら、相手は「あなたはもしかしたらミセス・ツヨシ・サイトウでいらつしやるのでしょうか」とことばをつづけた。久美子は「ノー」と答えたが、そのあと少し奇妙な気がしたのは、彼女が「オウ」と、いかにも西洋の人間らしく小声だったが大仰に叫んだあと、「では、あなたはミスター・ツヨシ・サイトウの身内のお方ででしょうか」と遠慮がちな口調ですぐつづけて訊ねて来たとき、彼女の声がさつきまでの緊張を失って、安堵したものに変わっていたからだ。

「私は彼の娘です」と久美子は言い、「私の母、ミセス・サイトウ・ツヨシはずいぶん以前に亡くなりました」とつけ加えた。「私の父、ミスター・サイトウ・ツヨシの亡くなるまえです」とはつけ加えなかった。口から出かかったが、とつきに抑えた。

日本語で言うなら「ああ、そうですか」というぐらいの軽い相槌のことばになつてしまふにちがいない、久美子が耳ざわりに感じてとつきにそう自分の心のなかで訳した「イズ・ザット・ソウ？」を相手はたぶん思わず口にしたあと、またあとをどうつづけていいのか判らなくなったのだろう、少しのあいだ黙つてから、「あなたの名前は何かですか」と、訳せばそれぐらいの言い方になる無遠慮な——そう久美子の耳にひびいた質問で唐突につづけた。「私の名前は斉藤久美子です」と久美子はすぐ答えた。

これは久美子が実際に口にした英語では、「マイ・ネイム・イズ・サイトウ・クミコ」になる。こういうとき久美子は日本人がたいていするように姓と名の順序を逆にして「クミコ・サイトウ」と言わなかった。いつも、よほどのことがなければ、彼女の名前は変わらず「サイトウ・クミコ」だった。そう彼女は名乗った。この、姓と名の順序を逆にしないで、日本語での語順通りに自分の名前を言うあたりまえのやり方を昔からしていたのは父だった。父は何事においても、ひとり娘の久美子に自分のほうからああしろとかこうしろとか言い出すことはまずなかったから、久美子が自分でやり始めたことだったが、久美子もいつからか、父が自分のことをいつも「サイトウ・ツヨシ」と言っていたように、「サイトウ・クミコ」と名乗った。もつとも結婚していたあいだは「キノシタ・クミコ」だったが、五年前に離婚して「サイトウ・クミコ」に戻った。

父はときどき言った。「中国人を見ろよ。連中はみんな自分の国の流儀で自分の名前を言うのやないかね。日本人は自分にとつて一番かんじんなはずの自分の名前について愛国心がないのか。愛国心をうるさく言うやつがマイ・ネイム・イズ・タロウ・ウチムラとか何とかうれしそうに言いやがる。」そう憤慨するように言ったあとを、よく「私は度し難い頑固なナシヨナリストだ。名前のことに限らず、そうだ」と宣言するようにつづけた。

「じゃあ、あなたのお名前は？」と久美子は少し乱暴な言い方でき返した。「ぎつきあなたはたしかにお名前をおっしゃった。しかし、私には残念ながら聞き取れませんでした。」久美子は堅苦しい言い方でつづけた。その上で、もう一度、「あなたのお名前は何かとおっしゃるのですか」とすこし高飛車に念を押すようにくりかえした。

「私はミス・ジーン・プロールです」と彼女、いやジーンは、彼女も声を少し大きくして、「正式」に自分を紹介してみせるように自分の名前に「ミス」をつけて答えた。「ミス」でも「ミセス」でもなかった。当世風に「ミス」を自らの姓名に冠してアメリカ人女性ジーン・プロールは日本人女性斉藤久美子に向かつて「正式」に名乗りをあげた。大げさすぎる言い方かも知れないが、その感じがたしかにした。

そのあと、口調を変えて、ジーンは、おさしつかえなければ自分の滞在中にあなたにお会いすることはできないでしょうかと丁寧な言い方で訊ねた。「イエス」と答えかけて久美子は口ごもった。答えるより先に、久美子のことをささえるようにしてジーンが「ほんとうにお会いしたいのです」と丁寧な言い方から一転してせつぱつまった言い方に変った。その口調でつづけた。「ぜひお会いしてお話したいことがあるのです、私の母とあなたのお父さんのことで。」せつぱつまった口調がキツパリ言った。

二 すべて初めて

翌日の午後、久美子は自宅で彼女——ミス・ジーン・プロールと会った。今年、高校二年生になる娘、美佳と久美子が今二人で住む、駅から歩いて十分ほどの、大きからず小さからずの「中流」の住宅の建ち並ぶ住宅街の一角の、古ぼけた自宅だ。築四十年。四十二歳の久美子とほぼ同じ歳の二階家で、これは久美子の母が口癖のようによく言っていたことだが、久美子が生まれたのでそれまでの六

畳ひと間のアパート暮らしではやって行けなくなつて、あちこち探したあげくに見つけたのがこの格安、出物の建売住宅だった。格安、出物でも、そのころは久美子の父はまだ薄給の大学の英語講師だ、銀行やら友人やらその他あちこちから借金して父はようやく手に入れた。格安、出物にしては、家はできがよくて、よく保つた。これも久美子の母が口癖にしていた。そのできのよさで、震度七の激震でも、周囲の大きからず小さからずの「中流」の住宅には全壊、半壊したのが数多くあつたにもかかわらず奇蹟のように倒れずに立ちつづけた。

しかし、もうとにかく古びてしまっている。それに、やはり、震度七で根もとから揺さぶられて、地震直後に修理はしたものの全体にどうしようもなくガタが来ている。こんなのは今さら修理するより壊して建て直したほうが安全だし、ずっと安上がりだと、久美子のまわりで誰も彼もが言った。久美子と同じようにひとり娘の美佳も「お母さん、こんな、地震に遭うて潰れかかった、げんくそ悪い家にいたら、それだけで元気がのうなる。ここは、早く潰して新しい家建てようよ」と口を開けば言った。「お母さん、うちにはお金がないの？」とあるときはきいた。「ありません」と久美子のはつきり答えた。お金もたしかにないが、久美子はこの古ぼけた二階家を壊したくなかった。自分はこの家のなかで赤ん坊の時代から育ち、大きくなり、震度七の激震にもこの家とともに生きのびたのだから。前日の電話で久美子がジーンに自宅に来るように言ったのは、その日がちょうど土曜日で久美子が家にいるからだつたが、ジーンは彼女の母親と自分の父親のことで話があると言つて来ているのだ、彼女を自宅に招いたあとになつて、父親ゆかりのこの自宅で話を聞くのがもつともふさわしいことであるような気が久美子には改めてして来ていた。

しかし、いったい何の話があるというのか。その日、久美子は朝から落ちつかなかった。自宅を持ち帰って来ていた仕事もあまりできずにいて、約束の二時近くになると、家のなかで待っているのが耐えがたくなつて外に出て、玄関わきのハーブの花壇の手入れを始めた。友達のところへ行く、と玄関から出て来た美佳が「お母さん、どうしたの？」とげげんな顔で久美子に訊ねて来たのも、やはり、彼女がいつもとちがって見えていたからだろう。「どうもしていません。いつもと同じです」と、むしろ自分に言うように久美子は言つて、ちょうど薄紫の小さな花を点々とつけ始めたローズマリーの手入れにとりかかったが、作業を始めて四、五分経つたところで、ジーンがゆつくり大腿に歩いて来るのが見えた。

想像した通り、若い女性だった。草むらに小さな花が一面に咲き乱れているような花模様のベージュのワンピースをゆつたりとかたちよく着こなして、裾から突き出たいくぶん太めの長い脚を大きく動かして大腿に颯爽と歩いて来た。六月のまだ梅雨のさなかだったが、その日は奇蹟のようにカラリと晴れた、湿気の少ない気持ちのいい日で、彼女の颯爽とした出現にこれほどふさわしい日はないように思えた。

ああ、久しぶりに「アメリカ娘」がやつて来る——と久美子は思った。久しぶりの「アメリカ娘」との、いや、「アメリカ」そのものとの対面だとも思った。背は高い上に発育がいいことばがピツタリする体格の持ち主で、全体が大柄だった。顔も大きいし、眼も鼻も口も顔のサイズに比例して大きく、きわだっている。髪は薄い栗色。軽くウエーブをかけて、かなり長い。今は何も被っていないが、派手に太いリボンをつけたツバ広の大きな帽子を被つても、この子なら似合うと久美子は判断できた。

さして美しい女という印象はなかったが、大柄な全体がこの若いアメリカ女性の魅力を十分にかたちづくっている。年齢は二十五、六歳。もう学生ではないが、学生の雰囲気はまだまだ残している。

奥のリビング・キッチンに久美子は「アメリカ娘」を招じ入れた。まんなかの大きな食卓用の円テーブルの横に、例の「ロータス」のための現地商品仕入れの旅で、出物を見つけたと言って父がときどきやらかした愚かな衝動買いで、中国で買って送らせた、あまり趣味のよくない大きな花の彫り物のある直立した背の椅子と、同じ花の彫り物の卓子を出して、久美子は彼女と卓子を隔ててむかいあわせに座った。

煎茶と羊羹を出した。はじめは紅茶と、このごろ駅前にできた洋菓子屋の、このあたりとしてはできのよいチーズ・ケーキのとりあわせを考えていたのだが、「アメリカ娘」の颯爽とした来訪の姿を見て、久美子は古風な、たぶん古風すぎる日本式のもてなしに変えた。そのほうが久しぶりの「アメリカ娘」を迎えるの接待にふさわしい。そう彼女は判断した。

「アメリカ娘」相手のことだ、何ごともまっすぐ率直にしたほうがいい。そう心を決めた久美子は、初対面の挨拶を交わしたあと、彼女のほうから「その、あなたがあなたのお母さんと私の父のことで、お話しになりたいことは何でしょうか」と単刀直入に、あまり丁寧でない口調で訊ねかかった。しかし、久美子はことば半ばで口をつぐんだ。「アメリカ娘」ジーンが、久美子のことばの途中で、「私の母は一昨年九月に亡くなりました」と、これは久美子がまったく予想もしていなかったことばを口に出していた。あまりに思いがけないことばだったので、久美子は不意を衝かれたように黙り込んだ。

日本語でも、こういうときどう言えばいいのか。突然、思い浮かんだのは「それはまたご愁傷さまのことで」という、日本人としてこの社会のなかでこの年まで生きて来ても、いまだに彼女には意味の判然としないことばだったが、それはどう考えても久美子自身言われてかえって怒り出すにちがいない、まったく気持のこもらないお座なりのことばだ。それとも、私ももう何年もまえのことになるが母親を亡くした女性だ、あなたの悲しみはよく判る、しかし、人間誰しもに死はある、元氣を出して下さい、というたぐいの、もうひとつ別種のお座なりを口に出せばよいのか。

それに久美子は今、地元の高校で英語を教えているが、英語を実際に使って暮らす世界からかけ離れて生活している。ずっと以前、高校生でアメリカに留学していたときなら、それなりに適当なことばを口に出せたかも知れない。しかし今はちがう。一瞬、思い惑った久美子は、押し黙った。

「私の母アリスは生きているとき、どうやらあなたのお父さんのツヨシと愛し合っていたようです。二人がまだかなり若い時代に始まった二人の關係は長く中断したあと、また始まったようでした。」

ジーンは、自分の母親にも久美子の父親にも距離を置いた言い方でしゃべり始めていた。久美子は黙って聞いていた。聞いているよりほかに仕方がなかったと言えば、彼女の今の気持に即している。もちろん、久美子はおどろいていた。はじめて聞く、それこそまったく予想もしていなかった寝耳に水の話だ。さつきジーンが初対面の挨拶のあと、突然自分の母親の死のことを口にしたのも久美子を十分におどろかせていたが、これはもう他人の母親の死の話ではない。その他人の母親との自分の父親の、こともあろうに愛の話だ。久美子は文字通りことばを失ったかたちで呆然としていたが、奇妙なことと同時に久美子は、ジーンが距離を置いて話す彼女の母親と自分の父親、アリスとツヨシの愛

の話を、あり得ることだ、いや、あつてふしぎでないことだと冷静に聞いていた。

ジーンは、二人の関係は二人がまだかなり若い時代に始まり、長い中断のち再開したと話し始めたあと、ふと気がついたように「あなたはお父さんから私の母のことは何も聞いていらつしやらなかったのですか」と念を押すように訊ねた。「聞いていませんでした。あなたが今お話しになつてゐることは私がすべて初めて聞くことです。」久美子は「すべて」と「初めて」に力を込めて正直に答えた。答えてから、生きてゐるとき母は知つていたのだろうかと疑念に駆られた。

「二人が最初に会つたのは、たしか一九六九年、ワシントンでのことのようにです。そうだとすれば、私の母アリスはそのとき三十一歳、私の父ノームと結婚するまえでした。アリスとノームはすでに婚約してゐました。」ジーンは変わらず距離を置いた言い方で静かに言つた。

そこに父ツヨシが立ち現れたというのか。まるでありふれたテレビ・ドラマさながらの話だと久美子は鼻白んだ気持ちになつたが、しかし、この話は他人の話ではなかつた、自分の父の話だ。

「ツヨシは何歳でしたか……たしか三十七歳でした。決して若くはないが、まだそれほど年をとつていたとは言えない。……」ジーンは他人ごとのようにつづけた。いや、まちがひなく彼女にとつて他人ごとだつた。久美子は何か言おうとしたが、ことはなかつた。

「しかし、二人はそのときおたがいに好意をもつたものの、それともすでに愛し合つてゐたのかも知れませんが、そのときには、男女の愛がふつうたどる行程には行かなかつたようです。」ジーンはもつてまわつた言い方をした。久美子の記憶にアメリカにいたときどきどき耳にした、一度はまぎれもなく久美子自身にむかつて言われたことのある「いっしょに寝る」(sleep together) という露骨な表

現の英語が唐突によみがえつて来た。「行かないままで翌年七〇年には、二人は別れたようです。」ジーンはつづけた。

「どうして行かなかったのだろう。」久美子はひとり言をつぶやくように言った。ほんとうにひとり言だった。口からことばがひとりでに滑り出た。

「それは、やはり、ノームのことがあつたからだと私は思います。」ジーンは落ちついた口調で応じた。「ノームはワシントンにいなかったのですか？」久美子は当然の、そう彼女に思われた質問を口にした。ジーンの答が久美子をおどろかせた。

「いなかつたのです」と、久美子のことばを口写しするようにして答えたあと、「彼はそのころベトナムにいました」と、ジーンはまた久美子にとつてまったく意外のことばを口にしたが、さらにおどろくべきことばをつづけた。「彼は『ハノイ・ヒルトン』にいました。出るまで総計六年の長期滞在客でした。」

ちよつとひょうきんな感じが出た口調でそう言ったジーンは、「あなたは『ハノイ・ヒルトン』をご存知ですか。それが何か、何を意味するか」と、久美子の知識をたしかめてみるように口調を生真面目なものに変えて訊ねた。

「知っています。」久美子は大きくうなずいて言った。「知っているつもりです。」

久美子は当時まだまだ稚なかつたから、あとになって知つた知識だが、ベトナム戦争のあいだ、ハノイには捕虜になつたアメリカ軍兵士の収容所があつた。大半はアメリカ空軍の北ベトナム爆撃——「北爆」で乗機を撃墜されて捕虜になつた元パイロットたちだったが、彼らはその自分たちの収容所

を「ハノイ・ヒルトン」と、アメリカ人らしく陽気に呼んでいた。

「しかし、それ、ほんとうの話でしょうか」と、久美子が思わず信じたいというような言い方で訊ね返してしまつたのは、話があまりに突拍子もなかったからだ。久美子は「ノームは……」と言いつけて「あなたのお父さんは……」と言いなおしてから、「ベトナム戦争に行かれたのですね」と判りきつたことを確認するようにつづけた。

「ええ、行きました」とジーンは短く答えた。一瞬黙つてから、「父は爆撃手でした。優秀な爆撃手だったそうです。上位の勲章も貰っています」と、少し早口につづけた。「しかし、ベトナム各地を爆撃してまわっているうちに撃墜されて捕虜になりました。パラシュートで脱出した父を地上で待ち構えていて捕まえて本部まで連行して行つたのは十五、六歳の少女だったそうです。私はまだ小さかったのですが、父は酔うと、ときどきそんな話をしたことを憶えています。その話をしては、いつも、あんまり自慢にならん話だが、とつけ加えていました。」父親のことを思い出しているのかも知れない、ジーンは微笑した。

「ざつきも言いましたが、『ハノイ・ヒルトン』に私の父は、一九七三年にアメリカ、北ベトナム、南ベトナム、南ベトナム臨時革命政府のあいだでパリ停戦協定が結ばれて釈放され、帰国するまで、六年いました。」ジーンは停戦協定の締結国の名称をひとつひとつ、少し言いくさうだったが正確に口にした。「父が、ベトナムで手柄をあげて速く昇進しようとしていたのか、それとも、ほんとうに自由のために戦っているつもりでいたのか、あるいは、そのふたつともが目的だったのか、私には判りません。確実に言えるのは、彼が優秀な爆撃手であったこと、その功績で上位の勲章を貰ったこ

と、しかし撃墜されて捕虜になり、『ハノイ・ヒルトン』に六年間滞在したあと停戦協定成立で釈放され、帰国したことです。」

そこまで事実を列挙するように一気に言ったあと、ジーンは久美子の顔をみつめながら、「もうひとつ大事なことがあります。父は帰国して少し経って母と結婚し、やがて二人のあいだに男の子と女の子が二歳ちがいで生まれました」とつぶけた。

「その女の子が今ここにいらつしやる。」久美子は少しおどけた言い方をした。「では、二歳ちがいの兄さんは今どこにいらつしやる？」久美子はずみがついたようにおどけた口調をつづけた。

「彼は今ここにいません」とジーンも弾みがついたようにおどけた口調で応じた。「じゃあ、どこにいますか」と久美子はおどけた口調をさらにつづけて訊ねたが、ジーンはまた久美子をおどろかせる答を口にした。「彼は今ベトナムにいます」と、こともなげにジーンは言い、「もちろん、ベトナムへ戦争をしに行っているわけではありません。彼の会社の仕事、ビジネスをするためです」とつけ加えた。世界は変わった、と久美子は思った。どんなふうに変ったかは言えたものではないが。とにかく変わった。久美子はこのことのようにして、「じゃあ、あなたのお父さんは今どうなさっていますか」と訊ねた。(お母さんは亡くなられたそうですが)とこれは心のなかで言った。

「父と母は離婚しました」とまたジーンは久美子の意表を衝くことばを口にした。「兄と私がまだ稚なかつたときです。二人は十年結婚していました。私たちを引き取って育ててくれたのは母です。たいへんな苦労だったでしょうが私たちがたいへんでした。しかしもうそれはそれで、すべてすんだことです。」

そこまでことばの切れ目なしに言ったジーンは、忘れかけていたことをつけ加えるように、「父は、母と離婚後再婚したのですが、数年経って自殺しました。だいぶあとになって、母も私たち子供もそれを知りました。父はPTSDというものでしょうか、戦争の心的後遺症を病んでいたのかも知れません。ベトナム戦争は従軍者のなかにPTSDの人が多い戦争です」と落ちついた口調で言った。

三 安心と不憫と

久美子は黙って聞いていた。黙って聞いているよりほかにないものだった。落ちついた口調でジーンはつづけた。

「あなたのお父さんと母が再会したのはたしか九〇年、母が私の父と離婚して六年経つてのことのようです。七〇年に別れて以来でしたから二十年、二人は会っていなかったのですが、あなたのお父さん、ツヨシはたしか五十八歳、私の母アリスは彼とたしか六歳ちがいでしたから五十二歳でしたでしょうか、二人は愛し合った。今度はもうノームの問題はありませんでした。それは二人が男と女として愛し合ったということです。考えてみると……」ジーンは微笑した。「私はそのころ十二歳、兄のデイビッドは十四歳でしたが、もちろん私たちはその母の秘密について何ひとつ知らないでいました。」

ジーンはことばを切って久美子を見た。（あなたは？）と眉毛の濃い切れ長の眼が訊ねた。

「私は、もう結婚して、父の家庭を出ていました。」直接答える代わりに、そんな言い方で久美子はジーンの眼顔の質問に応じたあと、さらにひと言、「娘も生まれていました」と訊ねられてもいないこと

をつけ加えた。

聞いていて久美子が何かホツとして来たのは、父が五十八歳のときには、母はその一年まえに五十五歳で亡くなっていたからだ。父は最後まで母を裏切つてはいない。そう思うと、久美子は安心した気持ちになった。なれた。しかしそれでいて、やはり、母が不憫な気がした。その気持は残った。

何も言うことはなかった。訊ねることもなかった。久美子は黙り込んだ。ジーンも黙った。ぎこちない沈黙ではなかったが、二人はしばらく口を閉じた。

沈黙のあと、久美子は立ち上がって煎茶を淹れなおした。羊羹も切つて、新しい一切れを小皿に載せた。ジーンはしゃべっているあいだ、お茶もよく飲み、羊羹もよく食べた。久美子は自分が決めた日本式もてなしはよかったと無邪気によるこんでもいた。

「私の母とあなたのお父さん二人の二十年ぶりの再会はまったく偶然のことでしたが、これほどできすぎた偶然はなかった。」ジーンはお茶をひと口飲み、羊羹をかなり上手に楊枝で切つて口に運んでから、また物語でも語るような距離を置いた言い方で話し始めたが、すぐことばを切り、久美子の顔を正面きつて見せるようにみつめながら、「クミコ、あなたはそのときどこで二人が再会したと思いますか」と訊ねた。

これまで何度もそうだったように、久美子はまたジーンの唐突な質問におどろかさされた。まずおどろいたのは、彼女が突然久美子を「クミコ」と「ファースト・ネーム」で呼んだことだ。ふつう、こうしたことは相手の承諾を得てからするものだが、その「ふつう」は久美子が高校生で一年間、バールモン州の山間の小都市にいたときの「ふつう」だったのかも知れない。久美子は、そのとき高校生

の交換留学のプログラムで彼女を引き受けて、牧場のなかの大きな一軒家で一年暮らさせてくれた牧場主の老夫妻が、自分の娘を躾けるように教えてくれたその礼儀の流儀を、もう記憶が薄れて薄ぼんやりとしか見えて来ない二人の顔とともに思い出していた。しかし、もう今はそうした流儀はすっかり時代遅れになっているのかも知れない。すべてはもう三十年近い昔のことだ。久美子は自分が年をとったのを再確認するような気持で、時代遅れの礼儀の流儀を当然のように無視した、まだまだ若いアメリカ女性のつやつや光る頬と、唇の口紅の赤がひとときわ鮮やかな生気に満ちた大柄な、その印象のある顔をあらためて見た。

しかし、そんな些細なことより、久美子をもっとおどろかせたのは、ジーンが「あなたは二人がそのときどこで再会したと思うか」という自分の問いに、自分で答えるようにゆっくり口に出した二人の再会の地名だった。「ベトナム。」

「どうして、また、ベトナム？」が、思わず久美子の口を衝いて出たことばだった。アリスとツヨシ、いや、ジーンの母親と自分の父親の再会の場としてこれほど考えられない場所はなかった。

「私の母は小さな事業をしていました。そういう小さな企業の経営者の一団がベトナムの市場視察に行きました。ベトナムが経済の開放政策を始めたころで、市場視察がはやっていました。その一団のなかに母はいたようです。」ジーンはすぐよどみのない口調で答えた。

もう彼女はアリスとは言っていないかった。つづけて口にしたことばのなかでも、久美子の父はもうツヨシではなかった。「あなたのお父さん」だった。

「あなたのお父さんもベトナムに、あなたのお母さんが始められたお店の商品の買い付けか何かで来

られていた。あなたのお父さんはもう大学で教えるのを辞めていられて、それは私の母を少しおどろかせたようでしたが、とにかく二人は再会した、ほんとうにまったく偶然のことでした。あるいは、少し大げさに言えば、運命的なことでした。私の母が日記にそう書いていました。いいえ、あなたのお父さんがそう言い、自分もそう思つてイエスと言つたと書いていた。」

「あなたのお母さんは、ずっと日記を書いていられたのですか？」久美子はまたおどろいて訊ねた。同時に、父は日記を書いていなかったのかと、不意に疑問が心に浮かんできた。

「ずっとかどうかは判りません。」ジーンはうつすら微笑して答えた。

「一昨年死んだ母が遺して行つたのは、あなたのお父さんとベトナムで運命の再会をしたあと、当然のことのようにしてまた始まつた関係がつづいているあいだに始めて、ずっと書いていた日記でした。大きなノートブック五冊に鉛筆やボールペンで書いていました。母の字は乱暴でお世辞にも上手と云えない字です。読むのに、いや、解読するのにほんとうに苦労しました。」彼女はまた、うつすらと微笑した。

「日記と言つても断続的に書いていたもので、過去の思い出なども随所に書かれていて、私はそのおかげで、さつきからあなたにお話しして来たような、ワシントンでの出会いから始まつた、私の母とあなたのお父さんの長い愛の歴史のことも知ることができたのです。私の母の離婚後、二人はまたベトナムで出会つた。この再会はたしかにまったくの偶然だったのですが、すべてはまた、そのときそこから始まつた。そのすべてについて、私とその幾分かでも、今、知っているのは、母の読みにくい日記のおかげです。」ジーンはそこで少し口調を変えて、「彼と彼女は、そのあと世界のあちこちで会つ

ていたようです」とつづけた。

彼女は小さな貿易商をやっていたし、彼は彼で「アジア・西洋小間物屋」の店主だったから、世界各地へ行って落ち合ったりするのにおたがいのビジネスは役に立った。そうジーンの母の日記は正直に書いていた。ベトナムへは、最初の再会のあともう一度、ひとりはアメリカから、他のひとりは日本から出かけて、現地で落ち合つて何日かとともに過ごしているし、タイ、香港、韓国にも、短時日のことであつても、彼らの足は伸びていた。

ヨーロッパにも、そこに彼らにどんなビジネスがあつたのか、まちがいなくフランスには出かけていた。しかし、もつとおどろくべきことは、彼女が日本に来ていたことだ。二度か、三度は来ていた。「しかし三年ほどで、二人は別れたようです」とジーンはもう一度、口調を変えて言った。「どうして？」と久美子は思わず声を大きくした。「判りません。」彼女はまつすぐな言い方で答えたあと、また次のことばで久美子をおどろかせた。「しかし、そのあと、また一年ほど経つて二人は会い始めたようです。」「また偶然があつた？」久美子は訊ね返した。口調が思わず皮肉っぽいものになっていた。「ありませんでした。」ジーンはまたまつすぐな言い方で答えた。「今度はあなたのお父さんが私の母に手紙を書かれたようです。それで二人はまた会い始めた。二人の愛は、一年の空白のあと、まえにも増して深まつたようです。」そのあと間をおいて、重要なことを忘れていたというように少し慌てた口調で、「私が今言つたことは、私が勝手に想像していることではありません。母が自分で日記にそう書いていました」と几帳面につけ加えた。

「その日記を、亡くなられたあなたのお母さんは残されて行かれたのですね」と、久美子は自分の父

は何ものも残して行かなかつたとあらためて思いながら念を押すように訊ねた。「イエス」と彼女は声に出してうなずいてから、日記のほか、久美子の父に書いた手紙の下書きやらコピーやらをまとめて母は残して行つた、とつづけた。

そればかりではなかつた。しばらく黙つたあと、ためらいを押し切るようにジーンは、これはほんとうはあなたのお父さんに直接お会いして話すべきことだが、と前おきをして、私の母は、自分の日記や手紙の下書き、コピーとともに、久美子の父の彼女宛の手紙と、彼女の日記に似た、そのときどきの記録とともに、回想やそのとき考えていたことを断続的に書き記した、これも彼女の日記同様のノートブックを、無造作に段ボールの箱に詰めて残して行つたと、一語一語、自分が話していることをたしかめるようにゆつくり言つた。

ジーンは、悲しいのと時間がとれないのとで、母の死後、遺品の整理にほとんど手をつけていなかった。最近になつてようやくやり始めたところで、行きあたつたのが段ボールの箱だつた。箱を開いてみたとき、入っているのはただの古びた紙の山と見えた。よく見もしないでもう少しで捨てるどころだつた。しかし、何か気になつて古びた紙の堆積をかきまわしているうちに、なから大きなノートブックが五冊出てきた。好奇心に駆られて一冊を開いてみた。ボールペン書きの見慣れた、しかし読みにくい母の文字の列のなから、突然ひとつらなることばがふたつ、ジーンの眼に浮かび上がつて見えて来た。ひとつが「私は今ツヨシをまちがいなく愛している」なら、もう一つは「ツヨシも今私をまちがいなく愛している」だつた。一年の空白のあとの愛の「再開」(そうジーンは言つた)を書き記した五冊のうちの最後の一冊に、ジーンの母は、そのふた並びのことばを書いていた。

五冊のノートブックは二種類に分かれていて、そのうちあきらかに新しいと見える二冊が愛の「再開」のあとのものだった。その二冊目、ノートブック全体から言えば五冊目、最後の一冊の初めに大きく彼女独特の乱暴な書体で、ジーンの母は書いていた。

「二人の愛の再開は、そのあとどうなったの……」と、思わず久美子は言い出して、途中で口ごもってしまった。最終の結末が二人の死であることをすでに知ってしまっているからだ。

「判りません。」ジーンはまたまっすぐな言い方で応じた。「その五冊目の最後の日記は突然終わっていて、あとはどうなったか、まったく判りません。かなりの頁が書かれないで残っていたので、明らかに日記は中断しています。そのあと彼女は何かを書こうとしたのか、書きたかったのか、私に今判っているのは、母がそれから数年経って亡くなったことと、もうひとつ……」ジーンはことばを切つて久美子の顔を一瞬みつめたあと、「母が日記に書いた最後の日付が一九九四年十二月十七日であったこと。」

（ああ、それなら震災の起こるちょうどひと月まえのことになる、父が死ぬひと月まえのことになる。）久美子は、そのとつきの思いを口に出さなかった。その日、あなたのお母さんは私の父と逢っていたのか、いつしよにいたのか、いつしよにいたとすれば、いつたどこにいたのか、とたたみかけるように訊ねた。

「判りません。」またひと言で答えたジーンは、ひと呼吸するように間をおいて、「どこで逢っていたのか知りませんが、いつしよにいたのかも知れない。その日の項目は、ただ、今日はいい天気、とボールペンで書いた横にサインペンか何かで大きく乱暴に書いた文字で、HAPPYとあったただでした

から」と、微笑しながらつけ加えた。

四 新しい大定義

ジーンは、別れぎわに約束した通り、これからニューヨークへむかつて発つところだと、成田空港から電話して来た。

一昨日は会つて下さつてありがとうございました、いろいろ話せてよかつたし、お茶も羊羹もおいしかつた、そちらのお礼も申し上げます、と切れ目なしにしゃべつたあと、一瞬口ごもるように黙つてから、車で送つて下さつているあいだにあなたがおつしやつた、お父さんがお亡くなりになられていることは、私はあなたの家であなたと話しているあいだもまったく考えていなかったことで、たいへんな衝撃でしたと、口調を変えてつづけた。

帰りの新幹線の中で、一度も会つたこともない、私の母が書いたものとあなたのお父さんが書かれたものを通してしか知らないあなたのお父さんのことを何度も考えました。そのたびに母の死が思い出されて来るのか、涙が出てきた。――

そうひと息にしゃべつたジーンは、「さあ、もう発つべきときがきました」と宣言するように言い、これからあなたと私は古風に手紙を書き合うことを通してであれ、当世風に電子メールを使ってであれ、通信をつづけて行こう、とりあえず、手もとにあるあなたのお父さんの書かれたものをニューヨークに帰つてからお送りします、と早口につづけたあと、「ほんとうに会つて下さつてありがとうございました。感

謝します。あなたと話して、母の愛の相手が彼女にふさわしい日本人であったことが判ったような気がして来たからです」と唐突な言い方で言い、彼女のほうから電話を切った。

父の死のことを、久美子はジーンと家で話しているあいだ、何も言わなかった。「彼は今ここにいない」と前日の電話で告げたことばをそのままつづけるかたちで、ジーンの話聞いていた。ジーンもジーンで、自分の母と久美子の父のことを、その二人のあいだの「愛」という、二人自身にとつても、ジーンと久美子という二人の娘にとつても重大なことを話しながら、奇妙なことに、話の一方の主役の久美子の父については、彼が今どこにいいのか、何をしているのか、それどころか自分が今度いつ会えるのか、については何ひとつきかなかつた。ジーンは久美子の父がどこかにいることを当然の前提にして、同時に久美子はいないことを当然の前提にしてしゃべっていた。

話の途中で久美子は何度か父の死をジーンに告げようとしたが、ためらって止めた。あたかも父がいることのように、いや、同時にいないことのようにしてジーンの話聞き、受け答えるほうが楽だった。つらいことは、誰であれ、何であれ、先送りする。やがて彼女が帰る時刻が来て、久美子は新幹線に乗るといふジーンを近く「JR」の駅まで車で送って行くことにした。車が動き出してしばらくしてから、久美子はようやく、実は父は八年前に亡くなっているのだ、とためらいを押し切つてそれだけのことばを口に出した。家でのようにむかいあわせに坐っているのではないので、助手席のジーンの反応を見なくてすむ。そのとつきの判断が父の死を告げる気にさせたのかも知れない。久美子は感情を込めない口調でそれだけ言って、あとは何も言わなかった。

あまり唐突だったので、ジーンは返すべきことばを失ったにちがいない、「ほんとう？」と、聞きようによつては許しがたいほど失礼なことばを口にしたあと黙り込んでしまった。それは駅に着く直前のことだったが、ジーンは、成田空港からもう一度電話しますと言つてから、「いまお聞きしたこと、心からお悔やみ申し上げます」と型通りのことばを口にして、改札口をすり抜けるような身軽な動作で通つて入り、階段の降り口までさきほど久美子の家にやつて来たときのようにゆつくり大股に進んだ。階段を降りる直前に、ジーンは花模様のベージュのワンピースの裾を翻すような大きな動作でふり返つて「バイバイ」と小さな子供がするように手をふつた。久美子も手をふり、ジーンは姿を消した。

久美子は、父は八年前に亡くなったとだけ言い、震災で死んだとは言わなかった。

車を駅の立体駐車場に入れて改札口まで歩いて行くあいだに、八年前の震災のことは、やはり話しておかなければならないような気がして来て、久美子は、この地域をおそつたあの早朝の地震で一瞬のうちに六千人近くが死に、街は破壊され、焼失したと手みじかに話した。「あなたはその地震のこととは知っていましたか」と久美子はそれまで黙りこくつて聞いていたジーンに訊ねた。ジーンはうなずき、「テレビでもよく見ました。あれが、ここで起こったことだったのですね」と感慨深げにつづけた。久美子はもう少しのところ、その六千人近くの死者のなかに父がいたと言いかけていたが、またこの機会にしようとして心に決めた。駐車場は父の死について語るべき場所ではない。久美子は、ただ、この駅自体が大きな被害を受けた、地震があと二時間遅く通勤時間に起こっていたなら多数の死傷者をここでも出していたにちがいない、この駐車場ももたつたのが倒壊したあとまったく新しく建て

直されたものだとだけ言った。ジーンは黙ってだだっ広い駐車場のなかを見まわした。

久美子は、ジーンがニューヨーク生まれ、育ちの「ニューヨーカー」であろうとは、家で卓子をはさんで少ししゃべっているうちに、彼女の英語の発音と、もの慣れた都会人らしい、ちよつとした身のこなし方と気の使い方から見当をつけていた。何かのきっかけでジーンが自分からそう言い出したときに、もうすでに判断していたことだと久美子が言うとき、「おお、あなたはなんてすばらしい人」と大仰に喜んでみせた。「私の家系はもうこれで何世代にもわたってニューヨークに住みついています」とジーンはさらにつづけて誇り顔に言った。

「ご承知のようにニューヨークも、私の国アメリカのすべての土地がそうであるように、もとはと言えば先住ネイティブ・アメリカンアメリカ人の土地ですが……」ジーンは、学校でも「インディアン」というようなことばを使わないで教えられて来た、新しい世代のアメリカ人らしい言い方をした。

「ニューヨークは、ヨーロッパから来た白人の土地としてはオランダ人が最初に住みついたところですよ。私の母の家系の先祖もずいぶん昔にやって来たオランダ人でした。ただその後、これはアメリカではまったくありふれたことですが、アイルランド人、スコットランド人、ドイツ人という具合にいろいろな国のいろいろな民族の血が混じり合って来ていますが、ここでたしかながひとつあります。それは、私たちが何代にもわたってニューヨークに住んで来たことです。もうひとつたしかなことは、クミコ、私とその代々の『ニューヨーカー』の家系の末端に、はばかりながらつらなっていること。」ジーンは軽く笑いながら言った。

「面白いことがありました。母もそんなふうに思つて生きていたようです。私が今あなたに申し上げたのと同じことばを、母は残していった五冊のノートブックのどこかで書いていました。」

「あなたは……」と久美子は言いかけて「あなた方は……」と言いなおした。「よほどニューヨークが好きなのね。」

「ええ、好きです。」ジーンはすぐ答えた。そのわるびれない自然な答が久美子を微笑させた。苦笑もさせていた。

「母も好きでした。ニューヨークを私以上に愛していたかも知れない。」口調に力がこもつた。

「どうしてニューヨークが好き？」久美子は正面切つて訊ねた。ジーンは意外な答を口にした。「ニューヨークがアメリカだから。」ジーンはまた口調に力をこめた。

「ニューヨークはアメリカとちがうと言う人がよくいるけど……。」久美子はジーンのことばを引き取るようにも、逆らうようにも言つた。

ジーンは譲らなかつた。「しかし、私には、ニューヨークほどアメリカ……アメリカ合州国である場所はありません。」そう言つて、久美子を見返すように見た。「どうして？」また久美子は、正面きつて訊ね返した。

「アメリカほど、いろんな国のいろんな民族の人が来て、自分の流儀、やり方で生きている国は、世界にはないと思います。それがアメリカだとすれば、ニューヨークほどそれが出ている場所はない。私はそう考えます。」

ジーンも正面切つた言い方で久美子の問いに応じた。

「自然が美しいとか、自然の偉大さがここでは感じ取られるとか、そういうことは世界の他の国の他の場所にいくらでもあることです。そして、アメリカはもともとが先住アメリカ人が住んでいた土地です。私はそうした自然の賛美のことばは彼らにとつておきたいと思います。彼らの美しい土地を奪つて生きて来た私たち、ヨーロッパから来た白人には、それは言つてはならないような気がするのです。ただ、アメリカは……」

言いかけて、ジーンはことばを切つた。いろんな想念が彼女の頭のなかをよぎっているのにちがひなかつた。考え込んだ表情でしばらく黙り込んだあとで、ようやく心を決めたように一語一語ことばを選び取るようにゆつくりまた話し始めた。

「あの国の根ルーツにあるのは、やはりヨーロッパから来た白人です。しかしその根自体、アングロ・サクソン種あり、フランス種あり、ドイツ種あり、ロシア種あり、イタリア種あり、ユダヤ種ありのまさにゴタマゼの根でした。その上さらに、その根には彼らが奴隷として連れて来た黒人種の黒い根まですが、これは私は歴史の皮肉だと考えるのですが、なかにまぎれもなく入つてアメリカ全体の根はかたちづくられた。いいえ、もうひとつ大事な根がありました。さつきから私が言つて来た、先住アメリカ人種の根です。さらにこのゴタマゼの、ゴタマゼのゆえに太く強くなつた根にあとからやつてきたアジア人であれ、ラテン・アメリカ人であれの根が結びついて、今のアメリカのさらに太い、強い根ができ上つた。私はそう自分の国のことを考えているのですが、そう考えると、クミコ、ニューヨークほどアメリカである場所には他にないと思います。」

ジーンはことばを切つて久美子を見た。久美子は黙つてうなずいた。

「アメリカもニューヨークもご存知のあなたに、どちらについても甘い夢物語をするつもりはありません。アメリカには、いくらでも差別も偏見もあります。そして、あれほどの暴力社会はないかも知れません。ただ、私は世界を旅して歩いたことはないし、日本へも初めて来たくらいですが、さつきから申し上げて来たいろんな根をふくみ込んでの太い、強い根は、やはりアメリカ、私が考えるアメリカのもの、アメリカの誇るべきものだとは私は信じます。」

「私は信じます」——「アイ・ビリーブ」にジーンは力を入れて言った。

「ニューヨークはそのアメリカの太い、強い根を体現している都市です。だから、クミコ、私はニューヨークが好きです。愛しています。」

久美子をまつすぐな視線でみつめながら、一連のことばの最後の「私は愛しています」——「アイ・ラブ」にまた力を込めて言ったあと、それまでひとりではほとんどしゃべりづめにしゃべって来たジーンは久美子のことばを待つように黙った。

「よく判ったわ、ジーン」と、久美子は年長の姉の口調でことばを返した。「ジーン」と自然に彼女の名前が口から出た。出てから、久美子は初めてジーンを名前で呼んだことに気がついた。久美子はまた「ジーン」と呼んでつづけた。「私がアメリカ人……あなたのようにニューヨーク生まれ、育ちのアメリカ人なら、きつと同じようなことをアメリカについて、ニューヨークについて考えていると思う。」

久美子は、ジーンの大柄な体格にふさわしい大きな顔を見返した。目鼻立ちが大ぶりではつきりしているのをさらに目立たせるように、厚めの唇に真紅の口紅が鮮やかにつけられている。久美子の視

線が自然に和んで、さつきからの口調のせいもあつてか、久美子の眼は年長の姉が妹を見る眼になっていた。そう久美子は自分を感じ取った。

「私の母はよく言っていました。」ジーンは久美子の反応に力を得たのか、先刻よりも自信のこもった、そう久美子に感じられた声で、軽くウエーブのかかった薄栗色の髪に手をやりながら言った。「民主主義は、価値の多様性を政治的に容認、保障するとともに、各価値間の対等、平等関係を政治的、社会的に形成、維持する政治技術だ、と。」

久美子はそのあともつづけようとするジーンを、また「ジーン」と呼んでさえぎった。「私の父も私によく同じようなことを言っていました。」

二人はどちらからともなく笑い出していた。

笑いながら、「何だ、何だ、母が私に教えてくれた民主主義の新しい大定義は、私の偉大な母上様が創り出したものだとおろかな私はずっと考えて来たのに、あれはどうやらあなたのお父さんという賢明な日本人の大学教授が考え出されたものであつたらしいのね」とおどけた言い方で言い出したのはジーンだったが、久美子も笑いながらジーンのことばを同じおどけた口調で引き取った。

「それは判らないな、ジーン。……新しい大定義を創り出したのは、やはり、あなたの偉大なお母さんだつたかも知れない。私の父はたしかに大学で教えていましたが、彼が教えていたのは、政治学というようないかめしい学問とちがつて、彼の口癖を使って言えば、ただの英語でした。それに彼があなたのお母さんと二十年ぶりに再会して、こういう言い方が適切かどうか知りませんが、二人が本格的に会い始めたころには私の父は大学を辞めて、それこそただの小さな店の店主になっていました。」

そういう事情を勘案すると、やはり大定義の創案者はあなたの大偉大なお母さんだと考えるべきです。私の父はどこかでああなたのお母さんと会っているあいだに、彼女のご講義を感心して聞いて、日本に帰って来て私に受け売りの講義をやつてみせた。それだけのことです。」

このおどけたやりとりのおかげで、久美子が年長の姉の眼で妹のジーンを見るようになったあととも、二人のあいだのどこかに感じられていた薄い膜のようなものが自然に消えて、おたがいが不意に近くなったようだった。

二人はしばらく笑いながら、ジーン之母と久美子の父のどちらが大定義の創案者であるかをまだ飽きずに言い争った。この、実の姉と妹ならいつでもどこでもやっつていそうな子供じみた言い争いは、二人の気持をいつそう近づけた。「じゃあ、年長の私がこの不毛な論争に究極の決着をつけてあげる。ジーン、お聞きなさい。」

久美子は年長の姉の威厳と貫禄を見せていかめしい口調で言った。そして、子供のころ「おまえはいつも男の子のようにこわい顔をしている」とよく母に小言を言われた、今は娘の美佳が同じようなことを言う顔をいかめしくさせて妹のジーンを見た。ジーンは笑い出すと思つたら奇妙に生真面目な表情で黙つて聞いていた。ほんとうに年少の妹が年長の姉の話に聞き入っている、そのふぜいがあった。「この場合、もつとも無難な想像は、愛し合っている二人がいつしよに考え出したというものではないかしら。日本人とアメリカ人、異なつた歴史と文化を持つ二人が愛し合つて、しゃべり合い、知恵を出し合い、議論もし合つていつしよに作り出したのが、この民主主義の新しい大定義……私はそう考えるのがいちばん妥当で無難な結論だと思うな。」久美子は言い終えてから「ジーン」と妹に呼び

かけ、「あなたはそう思わない？」とことばを継いだ。

「思います。」ジーンは生真面目な表情のまま答えた。あまり生真面目な表情なので、久美子は「いつどこで二人が議論し合い、大定義を考え出したかはもうこれ以上論じないことにします。場所はベッドのなか、時間は二人の愛のいとなみのあとだったのかも知れないので」という、とつぎに思い浮かんだ一連のことばは口に出さなかった。年少の妹には言えない、言ってはならないこともある。そう思うと、久美子は何か無性に愉快になった。さつき家に来るまでまったく見知らぬ「アメリカ娘」だったジーンにいつそう妹に対するような親愛感を抱いた。

五 静かな抱擁

成田からジーンがお別れの電話をかけてきてから十日ほどして、久美子はかなりの大きさの小包を航空便で受け取った。彼女の母親の五冊のノートブックなどともに残された、久美子の父の手紙の類を送るとジーンが約束して帰った、その小包だ。落ちつけ、落ちつけ、と久美子は心のなかでくり返しながら小包を開いた。手が少し震えた。

まちがいはなく、ジーンの母親アリスに宛てた久美子の父の手紙の束と、父が書き残した大判のノートブック一冊が入っていた。

ノートブックの表紙には、父が最初は大学院生として、二度目にはたしか何か特別の研究生として籍を置いていた、ニューヨーク近郊ロングアイランドの小さな大学の仰々しい紋章がついていたが、

最初のときにしろ二度目にしろ、留学のときに買ったものではなくて、アリスとのベトナムでの再会のあと、父がアメリカに行ったときに彼女を思い出の大学にまで連れて行き、ついでに買ったノートブックだろう。そう久美子は勝手な想像をした。

父の手紙は太いゴム紐でかなり分厚い束にひとまとめにされている。久美子はこれが一番古いものにちがいないと見当をつけて、束のいっとう上の、航空便の封筒が半ば黄ばんだ一通を引き抜いた。見当がまちがっていなかったことは、薄手のタイプライター用紙十枚にタイプライターの活字でぎつしり打ち込まれた手紙を少し読み出してすぐ判った。手紙の日付は一九九〇年十月十三日だったが(手紙の頭部にあった"Oct. 13, 1990"の日付を、久美子は正確に記憶に刻みつけた)、父はそのときから三月まえに起こったベトナム、ホーチミンのホテルでのアリスとの二十年ぶりの再会を、「親愛なるアリス、大げさな言い方になるかも知れないが、あれはほんとうに運命的な再会だったと思う」と書き、その長い手紙を始めていた。

一九九〇年と言えば、ジーンが言っていた通り、父が五十八歳、六歳年下のアリスが五十二歳のときだ。久美子は二十九歳で、結婚して五年、美佳はちょうど四歳。久美子の母が死んで一年経っていた。手紙にぎつしり打ち込まれたタイプライターの文字の字面を見ていて、突然自分のからだ全体が懐かしさで覆われるような気がして来たのは、その文字がまぎれもなく父が愛用していたスイス製の「ヘルメス・ロケット」の小さなポータブル・タイプライターの活字で打ち込まれたものであったからだ。久美子がまだ小さいときよく聞かされた話では、父が最初の留学である仰々しい紋章の大学の大学院生になったときに無理をして月賦で買ったそのタイプライターは、世界で一番小さい上に一番軽くて、

父はどこかへ旅行するときにはいつも持って行つた。ときには国内旅行でも持って行つていたようだ。持ち運びに便利にできていて、金属の蓋のような覆いをガチャリとかけると小さな取っ手のついた薄ミドリ色の平べったい金属製の箱になる。そのガチャリの平べったい箱への手品のような変貌が面白くて、幼いとき久美子はよく父にせがんでその手品の動作をやつてもらつたものだ。手紙はホーチミンで書き出していたが、出したのはバンコックだった。封筒の切手と消印がそう示していた。

使い古したタイプライターだ。活字の摩滅が激しくて、薄手の紙に打ち込まれた文字はどこどころ濡れたり、滲んだりしていた。活字があまり古くなったので一度全部取り替えたことがあつたが、それからでも活字が摩滅してしまうぐらいの時間が経つてしまつたのか、今さらながらの時間の経過の長さで早さに久美子は戸惑つた。

「私はまた今ホーチミンに来て、先日あなたとの再会の運命的な奇蹟——奇蹟としか言いようのない事態が起こつたホテルに泊まっている。これでもう四日になる。私の今ここにいる当面の理由の商談はこれまでで難航して来たが、また決してこちらが期待した通りのものにならなかつたが（ベトナムは何しろフランス、アメリカと戦つて勝つた国だ。単純でただ力任せのアメリカとちがつて一筋縄では行かないフランスを相手にしても戦い勝つた国だから、彼らは見事にタフだ。脱帽する）、それでもとにかくすんだ。明日、ここを発つてバンコックにむかう。」

父は自分たちの再会を、運命的だ、そう感じると書いたあとを、そう一連のことばでつづけていた。久美子はお茶を淹れて、少し飲んでから読み進めた。父は奇蹟の再会について書いていた。

つづきは製品版でお読みください。